

サン・フェリーペ号の土佐漂着と
フェリペ・デ・ヘスースの伝記
故 松田毅一博士の業績を背景にして

奥 正敬

■はじめに

江戸時代初めの慶長十四（1609）年、当時のスペイン領フィリピンからメキシコへ向かっていたスペイン船「サン・フランシスコ号」が房総半島沖で難破し、村人たちがメキシコ人を含む三百人以上の人々を救助しました。そして、徳川幕府は彼らをメキシコへ帰国させました。この出来事が今年（2019）の日本と当時ヌエバ・エスパニーヤと呼ばれたメキシコとの交流四百年の原点になっています。

しかし、これより十三年を遡る文禄五（1596）年に同じくスペインのガレオン船「サン・フェリーペ号」が土佐へ漂着していました。この船に乗っていたメキシコ人でフランシスコ会修道士のフェリペ・デ・ヘスースは、当時の最高権力者である豊臣秀吉の外交政策の渦に巻き込まれてしまいます。この経緯については、今は亡き本学名誉教授の松田毅一博士が『秀吉の南蛮外交—サン・フェリーペ号事件』で詳細な検証を行っています。本稿では、この書物を中心にして事件の推移を確かめる中で、本学図書館が所蔵しているフェリペ・デ・ヘスースの関係書をご紹介します。

■フェリペ・デ・ヘスース、再び聖職者を志す

フェリペ・デ・ヘスース（Felipe de Jesús, 1573-1597）は、本名をフェリペ・デ・ラス・カサス（Felipe de las Casas）といい、メキシコ市で生まれました。両親はスペイン出身の裕福な名望家であり、わが子を聖職者とするのが希望であったようです。このため、彼は両親の意に沿ってプエブラのフランシスコ会の修道院に入りましたが、厳しい修練に耐えきれず脱会しました。その後、金細工師などの仕事を経て、1591年頃に商人を志して当時スペインの植民地となって

いたマニラへ渡りました。その間、後悔して再びフランシスコ会に入会して修道士として修練に励み、さらに宣教師となるためサン・フェリーペ号に乗船してメキシコに戻ろうとしていたのです。

■文禄の役から慶長の役へ向かう日本

サン・フェリーペ号は1596年、邦暦では文禄五年の七月にマニラ湾を出港し、日本海流に乗って北に向かう進路を取りました。日本の東北地方沖から東へ流れる北太平洋海流を使ってメキシコを目指していました。しかし、この船は台風と遭遇し、八月二十八日に土佐湾へ漂着したのです。

この年、日本では天正二十年即ち文禄元（1592）年¹⁾から太閤豊臣秀吉が、朝鮮半島に出兵していた「文禄の役」の和平交渉が行われようとしていました。しかし、交渉を控えた七月十二日に京畿地方に大地震があり、その後の余震で多くの建物が倒壊し、築城されて間もない伏見城でさえも大きな被害を受けるという有様だったようです。また、八月五日には被災地域に猛台風が襲い、洪水によって田畑が壊滅しました。この災害からの回復の兆しも見えず心中穏やかなでない太閤は、九月一日に明国から文禄の役の講和のための使節を大坂城へ迎えていました。しかし、この会談は太閤の激怒によって決裂しました。松田博士は太閤が再び朝鮮出兵の決意を固めた九月三日、もしくは四日に、土佐の領主である長宗我部元親^{ちようそ かのべもとちか}からサン・フェリーペ号漂着の知らせを受けたと見ています。

因みに、これより九年前の天正十五（1587）年に太閤は、関白として九州征伐に出向いていた最中に「伴天連追放令」と呼ばれるキリスト教禁教令を発しています。この頃は彼の権力体制が最も強固であった時期でしたが、実弟の秀長が死して以降、彼は側近の千利休を切腹させ、またサン・フェリーペ号漂着の前年には、甥で関白職にあった豊臣秀次を同じく切腹させるなどして、豊臣政権は次第に弱体化していきます。

なお、この船が漂着した文禄五（1596）年の十月二十七日には改元されて、同日より慶長元年となっています。